

平成 2 5 年度事業報告・収支計算書

特定非営利活動法人 アクション

海外事業

ジャイラホーム支援事業

実施場所：サンバレス州カステリヤホス行政区マグサイサイ町

実施期間：平成25年1月～同年12月

ジャイラホームはフィリピンのNGOによって設立され、孤児、虐待、育児放棄、貧困など様々な背景によって、親元を離れたこどもたちが生活する児童養護施設です。ACTION設立時の1994年から継続して支援を実施しています。施設運営の自立・こどもたちの生活環境の向上等を目的とする本件では、本年度は下記3つの活動を実施しました。

●児童養護施設の自立的運営に向けた農業支援

本プロジェクトはジャイラホーム内の空地进行を菜園として開発することで、無農薬栽培によるこどもたちへの安全な食の提供、収穫物の販売による同施設の自給自足体制の確立を目的としたものです。通年の活動として本格的に活動を開始してから7年目に当たる本年度は、昨年に引き続き、収穫の安定と菜園の独立採算化を目標として、苗床の作製、野菜の植え付け、栽培を行いました。

本年度は農業スタッフの入れ替えもあり、3月にクヤママル、4月にクヤロバートが退職し、5月からクヤホセが勤務を開始しました。クヤホセは本年度の5月に大学を卒業し、そのまま勤務を始めました。色々な人にアドバイスを頂いたり、グリーンガーデンという野菜を市場に卸している農家の視察をしたりと新しいアイデアを参考にしながら、野菜を真剣に育ててくれました。

本年度はペチャイ、ナス、インゲン豆、トマト、唐辛子、大根などを栽培しました。その中でもナスの収穫が頻繁に行われ、こども達のコテージに運ばれました。2、3、8、9月に実施されたキャンプ・スタディツアーの参加者に畑の草抜きを手伝ってもらったおかげで、野菜も収穫できました。9月にフィリピンを襲った台風ヨランダの影響でビニールハウスの1つが崩壊してしまったため、来年の雨期前までに修復する予定です。



スタディツアーでの草抜きの様子

●空手を通した青少年育成プログラム

本プロジェクトはこどもたちが空手の修養を通して忍耐力を養い、強い意思や規律、礼儀を身につけて社会に出ていくことを目的とした青少年教育です。昨年度に引き続きジャイラホーム内に設置された極真空手道場で現地指導員のもと、週5日稽古が行われ、施設のこどもと地域のこどもが共に稽古に励んでいます。

こども達のモチベーション向上のため、9月下旬から2ヶ月に1回の頻度でプラカン道場と合同稽古を開始し、本年度は計2回合同稽古を実施しました。1ヶ月間休まず真面目に稽古に参加したこどものみ合同稽古に参加できるという条件をつけたため、以前よりも稽古に真面目に取り組むようになり、参加率も上がりました。最初は他道場の生徒とは慣れない様子でしたが、2回目には親しく名前呼び合ったり、大会時にお互いを応援する程親しくなっていました。より多くの選手と稽古をする事により、色々な人の動きに慣れ、どのように対処するべきかなどを学ぶ事ができました。

本年度は計3回空手の大会に出場し、5月に行われた試合では男子15-16歳の部で第2位を獲得したこどももいます。10月から始まったこども達の朝夕のお手伝い当番により、こども達が自由に遊ぶ時間が減り、それが空手参加率にも影響を及ぼしました。そのため、来年度からは週2回と短期集中で稽古を実施します。そして、ジャイラホームから1時間離れた所に道場があるので、そちらとの合同稽古を頻繁に実施し、子ども達の向上心を維持していきます。



合同稽古の集合写真

●パキュット基金

ジャイラホームは資金不足が深刻であり、スタッフの給料未払いが頻発しています。それによりスタッフが継続して働けないという事は、こどもたちの親代わりである「ハウスペアレント」が頻繁に入れ替わるということの意味し、こども達の生活面にも精神面にも悪影響を及ぼし、こども達が健全に成長できる環境を提供するという児童養護施設の目的を果たすことが難しくなります。そこで、本件では昨年度に引き続き、給料の半額を支援することでスタッフを支え、こども達が健全に成長できる環境を維持するという目的で給与支援を実施しました。

昨年度に引き続き ACTION 年会費に統合する形をとり、こども達の世話をするハウスペアレンツ6名、ソーシャルワーカー1名（5月末まで）、スタッフ 1名、計8名のスタッフの給与半月分を支援しました。前者のソーシャルワーカーは2013年の5月末に退職し、新しいソーシャルワーカーが11月から勤務を開始しました。彼女には1年間、給与全額を支援します。

<支援対象>

1月～5月：ハウスペアレント4名、ソーシャルワーカー1名、アドミニストレーションスタッフ1名

6月～11月：ハウスペアレント4名、アドミニストレーションスタッフ1名

12月：ハウスペアレント4名、ソーシャルワーカー1名、アドミニストレーションスタッフ1名

<支援金額>

1月～5月：21,161ペソ（毎月の給与の半額）

6月～11月：17,161ペソ（毎月の給与の半額）

12月：31,161ペソ（ハウスペアレント・アドミニストレーションスタッフ：毎月の給与の半額／ソーシャルワーカー：全額）



ハウスペアレントとこども達

●こども達の精神ケアプログラム

昨年度よりフィリピン事務局に新スタッフが加入しました。大学で心理学を専門に学んだAdra Matiasです。様々な背景を抱えるこども達にはより専門的な心理ケアが必要であり、心理学専攻の彼女の指導のもと、ジャイラホームと盲ろう学校のこども達に対して様々なアクティビティが行われています。

昨年度に引き続き、こども達の心境を把握するための交換日記を毎週実施しました。交換日記を通して、こども達がどのような事を考え悩んでいるかを把握する事ができました。また、ソーシャルリゼーションというプログラムも毎月末に実施しています。ソーシャルリゼーションとはこども達とジャイラホームのスタッフの関係性を良くするためのプログラムです。毎月テーマに応じてゲストスピーカーを呼び、ゲームなどをして日頃話さない様な事をこども達とスタッフが話し、理解を深めます。このプログラムを通して、日頃恥ずかしくて言えない感謝の気持ち、悩み、夢などをこども達とスタッフが共有する事ができました。

そして、本年度4月には初めてスポーツフェスタを実施しました。3日間のプログラムで、ゲーム、映画鑑賞、キャンプファイヤーなど、体を動かしたり、頭を使ったりと心身ともに鍛えられるものでした。2チームに分かれ皆で何かを成し遂げるという姿勢がこの3日間で見られ、こども達の中でもより仲が深まったようです。ハウスペアレントからは「ジャイラのこども達だけのために行事をする事は初めてで、ありがたい」と言う声も聞こえ、こども達も見ているスタッフも楽しんでいました。

今後もこども達の精神面のケアをするため、本年度実施した交換日記・ソーシャルリゼーション・スポーツフェスタを継続して行います。来年度は心理士スタッフとこどもが1対1で話ができるカウンセリングルームが完成するので、より深い精神ケアを行う予定です。



ゲームの説明をする心理士アドラ

盲ろう学校(ニニョスバグアサセンター)自立支援事業

実施場所：サンバレス州オロンガポ市オールドカバラン町

実施期間：平成25年1月～同年12月

ニニョスバグアサセンター（以下センター）は、フィリピンのNGOによって運営されている、主に盲・聾啞者を対象とした自立支援施設です。当会では1998年より活動の支援を行っています。

本年度は、新たにこども達のための精神ケアプログラムをスタートしたほか、前年度までに引き続き、内反足患者に対する医療事業支援、センター内に暮らすこども達および奨学生のこども1名に対する教育支援、2名の手話講師への給与支援を実施しました。

●こども達の精神ケアプログラム

前年度に当会のカウンターパートの1つである児童養護施設「ジャイラホーム」のこども達を対象として始まった本プログラムですが、今年度よりセンターのこども達もプログラムの対象とし、心理ケア担当の当会スタッフにより様々なアクティビティが実施されました。

1年を通じて実施したアクティビティは「日記」と「カウンセリング」で、こども達に1人1人に日記をつけてもらい、それをもとにカウンセリングを実施します。センターに暮らすこども達は様々な不安や悩みを抱えていますが、そういったことを相談したり、話を聞いてもらったりする機会が不足しています。そのため、自分の思いをなかなか言葉にできない・表現できないこども達も多くいます。そういったこども達にとって、このアクティビティは自分の思いを言葉や文章にして人に伝えられる良い機会となっています。プログラム開始当初はこども達に心を開いてもらうことに苦労した当会のスタッフですが、現在ではこども達もスタッフにすっかり打ち解け、積極的に思いを打ち明けてくれるようになりました。

また、センターの外に出る機会や遊びの機会が限られているこども達に少しでも「楽しい」と感じてもらえる時間を増やすため、リサイクルペーパーづくり、ぬり絵遊びなど少人数のグループアクティビティやセンターのこども達全員が参加するグループ対抗のゲーム遊び、他の施設を訪問して異なる施設のこども達と交流をするなどのアクティビティも行いました。なお、こども達全員を対象としたアクティビティは異なる障がいをもつこども達がお互いを理解し、助け合うことができるようになることも目的としており、こども達全員が楽しめるように内容を工夫して実施しました。

本年度の活動を通して見えたセンターのこども達の長所や課題を踏まえ、来年度はさらにプログラム内容を充実させて実施していきたいと考えています。



ハウスペアレントとこども達



ハウスペアレントとこども達

●医療事業支援

センターでは、口唇口蓋裂・ヘルニア・水頭症・内反足など、体に障がいを持つこども達のためにスポンサーを募り、治療や手術の支援を提供しています。当会では、本年度はセンターで生活している先天性内反足のこども1名の治療支援を実施しました。本支援は前年度に引き続き実施したもので、こどもの定期検診にかかる病院までの交通費や食費、矯正器具費などの支援を行いました。

定期検診は当会のスタッフとセンターのスタッフがこどもに付き添い、マニラにある病院へ半年に1回のペースで通いました。病院で専門の先生に診察してい

ただき、今年度の検診でも悪化している箇所等は特になく、これまでの状態を保っているとのコメントをいただきました。ただし、「特に右足がまだ安定しておらず、矯正器具の使用を怠ると元の状態に戻ってしまう可能性もある」、「確実に治すためには矯正器具をつけての治療を13～14歳ころまで続ける必要がある」との診断も受けました。前年度の診断では矯正器具の装着時間を減らしていくことになりましたが、時間を減らしすぎてしまうという課題が見られたため、今後はセンターのスタッフとともにモニタリングを強化し、少なくとも病院で指示を受けた時間数は必ずこどもが器具を着用して過ごすようにしていきたいと考えています。

来年度も引き続き、矯正器具を着用しての治療および半年に1回の定期検診受診を行っていく予定です。



治療を受けるこども



定期健診を受ける様子

●奨学生の学費及び学用品支援

前年度に引き続き、センターの患者である聾唖のこども1名に対し、学費・学用品及び交通費の支援を行いました。本生徒は昨年度から公立の小学校へ通っており、今年度は2年生に進学しました。学校で友達と一緒に勉強すること、遊ぶことにとっても意欲を持っており、毎日楽しく学校に通っています。とても勉強熱心で授業の飲み込みも早いと担任の先生からも高い評価を受けています。なお、来年度も本生徒への奨学支援を継続して実施する予定です。



学用品を受け取るこども達

●こどもの学用品及び交通費支援

本年度は、センターから公立の学校に通うこども11名・センターで勉強しているこども5名の計16名に対して学用品の支援を実施しました。運営資金が不足しているセンターでは、こども達の教育にかかる予算を捻出することが難しく、6月に新学期が始まってからも学用品が不足したままこども達が学校へ通う状態になっていました。そこで、当会ではこども達に必要なノート・点字専用の紙・鉛筆・消しゴム・ボールペン・色画用紙・クレヨン等の学用品、制服、傘等を配布しました。

また、今年度からは盲のこども達も公立の学校に通い始めましたが、こども達のみでジープに乗っての通学は危険が伴うため難しく、センターから学校の前まで乗ることのできるトライシクルを利用するか、スタッフに付き添ってもらわなければ通学することができません。トライシクルはジープよりも値段が高いため、交通費が足りず学校へ通うことができないこともありました。特に雨季は足場が悪く、盲のこども達にとっては乾季以上に通学が困難となるため、当会では雨季の期間中の8名のこどもの交通費の支援を実施しました。来年度もこども達やセンターのニーズに合わせて教育面での支援を継続して実施していく予定です。



担任の先生と奨学生

●手話講師の給与支援

前年度に引き続き、センターの手話講師2名に対する給与支援を実施しました。当会では本講師2名に月の半額分の給与を支援しています。また、昨年10月より2名に同額の給与支援を行ってきましたが、1名の講師がパートタイム勤務となったため、今年の10月からはフルタイム勤務の講師1名へ3,000ペソ、パートタイムの講師1名へ2,000ペソを支援しました。



レッスンプランを作成する手話講師達

●バースデーカードの配布

当会では2010年9月より、センターで暮らす子ども達全員に対してバースデーカードの配布を実施しています。センターで暮らす子ども達の多くは家庭の事情により、長期にわたって家族と離れて生活をしています。そのため、誕生日の日もセンターでいつもと変わらない毎日を過ごしており、家族に誕生日を祝ってもらうことも滅多にありません。そこで、当会では過去のキャンプ参加者からバースデーメッセージを集め、

子ども達の誕生日の日や前後にバースデーカードを配布しています。今年度は20名の子ども達にカードを贈り、センターのスタッフや子ども達とともに誕生日をお祝いしました。



バースデーカードを受け取り笑顔のこども①



バースデーカードを受け取り笑顔のこども②

ストリートチルドレン支援事業

実施場所：サンバレス州オロンガポ市及び周辺地域

実施期間：平成25年1月～同年12月

当会では、2005年よりストリートチルドレン・貧困地域支援、児童の権利の啓発等の活動を行っているフィリピンのNGOタタッグ(Tayo Ang Tinig At Gabay(TATAG) = 私達自身が声であり道である)と提携し、こども達の奨学支援や貧困地域のインフラ整備、ライブリフッド事業の支援を行っています。活動9年目になった本年は下記の4つの活動を実施しました。

●奨学生支援プロジェクト

今年で9年目となる本プロジェクトでは、前年度に引き続き、奨学金支援を行っているNGO団体、「Growing People's Will (GPW)」様からご協力をいただき、10名の奨学生（高校生：4名・小学生：6名）への奨学金支援を実施しました。タタッグの裨益者であるこども達はほとんどがワーキングチルドレンや貧困家庭のこども達です。本プロジェクトで支援を受けている奨学生も放課後や週末になると路上に働きに出たり、働く両親の代わりに幼い弟妹の面倒を引き受けたりしています。こういった厳しい環境で生活するこども達に対して、本プロジェクトでは学費や制服・文房具代、交通費などの支援を行っています。GPW様からのご支援により、こども達はほぼ毎日学校に通い、勉強を継続することができています。来年度も引き続き、GPW様にご協力いただき、奨学生の支援を実施していく予定です。

また、平成23年度より開始したタタッグのストリートエドゥケーター1名への奨学支援も引き続き実施しました。奨学生のマラは大学3年生に進学し、ソーシャルワークのコースで勉強しています。専門科目や課外活動も増え、後期からは児童養護施設での実習もスタートしました。また、今年度マラはソーシャルワーク他3つのコースがある学部の生徒会長に選ばれ、現在は学業に励むと同時に学部の代表としても他の生徒を引っ張る存在として日々頑張っています。なお、タタッグの活動にも継続的に取り組んでおり、週末の公園での教育活動（ストリートエドゥケーション）でもストリートエドゥケーターとして、中心となってアクティビティを実施しています。タタッグでもこども達にとって頼れるお姉さんとして、信頼されるスタッフとして活躍しています。当会では、来年度も引き続きマラの奨学支援を行っていく予定です。更に、今年度はタタッグの大学奨学支援プログラムの元奨学生4名に対する特別支援も実施しました。2011年にタタッグと提携先のアウラ大学による奨学支援プログラムが突然終了したことにより、多くの学生たち

が大学での勉強を続けることができなくなりました。また、2011年度に卒業予定であった奨学生4名は卒業を目前にして、学業を断念せざるを得なくなりました。本4名は大学を卒業するためにタタッグが運営する就学前児童のための学習教室で4～5年間、こども達に授業を実施するボランティアを継続してきた実績があること、また、残り1年以内で確実に卒業できることが決まっていたため、本4名に対する奨学金支援の寄付を募り、卒業までのサポートを行うことを決定しました。現在までに寄付金額は目標金額にほぼ達成し、4名の卒業も内定しました。彼・彼女らが無事に卒業し、社会に出て自立することができるよう、来年3月末まで継続して支援を行っていく予定です。



学用品を受け取るGPWの奨学生達



大学3年生に進学したマラ

●雨季の洪水被害に対する緊急支援

2013年9月23日未明、当会のプロジェクト実施地域であるオロンガボ市にて大規模な洪水被害が発生しました。前日から降り続いた大雨・豪雨の影響で水位が急上昇し、早朝には各地域で人の高さを越える水位にまで達し、一時約2,500名が近くの小学校や役場に避難する事態となりました（Olongapo City Social Welfare and Development Office ; オロンガボ市役所社会福祉開発課より）。また、逃げ場を失い、屋根に避難したまま水が引くのを待つ人々も多くいました。タタッグの支援地域でも多数の被害が確認され、少なくとも市内11地域、160世帯以上（タタッグに所属している世帯のみ・一部バタアン州の地域を含む）が被災しました。洪水の勢いは比較的すぐにおさまったものの、被災した世帯では生活用品、靴、洋服、こども達の学用品や制服、あらゆるものが流され、家具が壊れました。また、浸水した家の多くは10cm～20cmの高さの泥が家の中まで入り込み、被災した家庭では泥を家の中から撤去する作業、真っ黒に汚れた服の洗濯や家具の掃除に追われました。

当会では10月～12月の3ヶ月間に本洪水被害に対する緊急支援金を募り、合計137,374円の支援金が集まりました。本支援金は全額被災地域のために使用し、特に大きな被害を受けた134家庭・193名のこども達に食料および学用品の配布を実施しました。今回支援を実施した地域は全て貧困地域であるため、被災した方々にとって厳しい生活は続いています。しかし、支援物資を受け取った地域のお母さん達からは笑顔、そして、感謝の言葉が絶えることはなく、皆様からの温かいご支援により地域の方々を元気にすることができました。



押し寄せた泥で汚れたキャビネットや教科書



洪水被害の様子



支援物資を受け取った地域のお母さん達

●タタッグへの路上・地域活動費支援

タタッグはこれまでオランダの財団より支援を受けて活動を実施してきましたが、支援期間満了に伴い2011年11月に当財団からの支援が終了して以降、財政状況が厳しい状態となりました。ミンダナオ島など他の地域への支援を強化する海外の財団やNGO団体も多く、そういった状況の中で資金獲得のための活動が思うように進まなかったことが原因の1つです。

そこで、当会ではタタッグが再び活動資金を得られるようになるまでの間、タタッグがこれまでと変わらずに本来の活動を継続できるよう、1年間を上限としてストリートエデュケーション（路上での教育活動）にかかる活動費の支援および地域での活動を担当するコミュニティオーガナイザー3名と就学前児童のための学習プログラム（Early Child Care Development (ECCD) Program）のコーディネーター1名への交通費支援、ECCDプログラムにかかる活動費の支援を行うことを決定しました。

今年に入ってから不定期での実施となっていたストリートエデュケーションですが、3月より当会からの支援を得て、毎週日曜日に確実に実施できるようになりました。また、それまで活動のあとにこども達配布する給食も提供が困難となっていたましたが、3月以降は再びこども達に給食を提供できるようになり、こど

も達は毎回活動に参加したあとで栄養のあるおやつを受け取ることができました。また、10月に実施した評価会議では活動を通して得られたこども達の成長の様子や活動の継続を希望するこども達の要望が報告されました。

オランダの財団からの支援終了以降、貧困地域での活動を担当するコミュニティオーガナイザー達とECCDプログラムのコーディネーターへの交通費の支給もストップし、彼女たちはそれぞれの活動地を定期的に訪問しモニタリングやミーティングを実施する等必要な活動が計画通りにできなくなっていました。こちら3月より当会が支援を行うことにより、以前のように各地域を回ってそれぞれの業務を遂行できるようになりました。また、10月に実施した評価会議では彼女たちが再び定期的に地域を訪問するようになったことで、「安心して活動できるようになった」、「地域内で出た問題や課題に対してアドバイスをもらうことができ、状況が改善した」といった地域住民からのコメントが報告されました。

また、ECCDプログラムの活動への支援として、先生達の定例ミーティングや能力強化トレーニングの実施等をサポートしました。前年度まではタタッグの奨学生である大学生がECCDセンターで先生としてボランティアを行っていましたが、奨学支援プログラムの終了に伴い、大学生たちがボランティアを継続することが難しい状況となりました。そこで、当会で特別に奨学支援を行っている4名の大学生たちをトレーナーとして地域のお母さんたちへの技術移転を行うとともに、地域のお母さんたちへの能力強化トレーニングを実施することにより、大学生たちがセンターを離れた後もプログラムを継続していくことができるよう、新しい体制をつくるための支援を行いました。

なお、これらの支援は来年3月まで継続して実施していく予定です。



おやつを食べるこども達



美術と工作のトレーニングに参加した先生達



ストリートエデュケーションを実施中の様子

女性のための所得向上支援事業

実施場所：マニラ首都圏マラボン市サンバレス州オロンガポ市

実施期間：平成25年1月～同年12月

当会では2009年より、こども達の生活環境をよりよくするために、母親世代を対象をした所得向上支援事業を行っています。活動5年目となった本年は下記の2つの活動を実施しました。

●オロンガポ市の女性のためのライブリフッド事業

前年度に引き続き、4名のお母さんとともにレジ袋を利用してつくるバッグやポーチ、雑誌などの紙を再利用してつくるピアス等のアクセサリ、ビーチサンダルにデコレーションするデコピーサン等の商品の製作を行いました。また、現在商品のデザインを担当してくださっているボランティアの方が9月に来比し、アクセサリ作りの基本はもちろん、色の組み合わせ方や日本のマーケットで売れる商品のデザインを考案し、製作方法を教えていただきました。本トレーニングによってお母さん達の製作技術が向上し、これまでよりも日本のマーケットで売れる商品を製作することができるようになりました。また、お母さん達の商品制作意欲もさらに上がり、モチベーションアップにもつながりました。また、商品の販売先は前年度同様、当会が運営するチャリティショップのほか、ワークキャンプ・スタディツアーや東京近郊でのイベント、また大学の学園祭などでも販売していただき、前年度よりも多くの方に商品を購入していただくことができました。来年度も引き続きボランティアの方にご協力いただきながら活動を実施し、現地のお母さん達の収入が向上するようサポートを行っていく予定です。



商品制作のトレーニングを受けるお母さん

●マラボン市の女性のためのライブリフッド事業

本事業は2009年に開始した事業で、こどもたちが健全に成長できる家庭環境をつくるため、また街の美化を目的に行っています。お菓子の袋を再利用した製品「エコミスモ」をフィリピンで製作し、日本で販売を行うことで、製作者であり、母親でもある女性達に適切な賃金が支払われています。現在では約50名の女性が商品の製作に携わっており、今年度は美容師向けのシザーベルトなど新商品も発売されました。

エコミスモの販売店舗の多くはハサミノチカラでもご協力頂いている日本の美容室で、現在、エコミスモを取り扱ってくださっている店舗は23店舗となっています。

来年度はより多くの店舗で取り扱ってもらうことを目標に、製作・管理・販売を行っていきます。



シザーベルトのチラシ

チカラプロジェクト

実施場所：マニラ首都圏マラボ市、サンバレス州オロンガポ市・カステリヤホス行政区
実施期間：平成25年1月～同年12月

本事業は施設や路上で働くこども達が社会に出て自立していくためのサポートを目指した事業です。本年度は日本の美容師の皆様のご協力を得て、「ハサミノチカラ」を実施致しました。

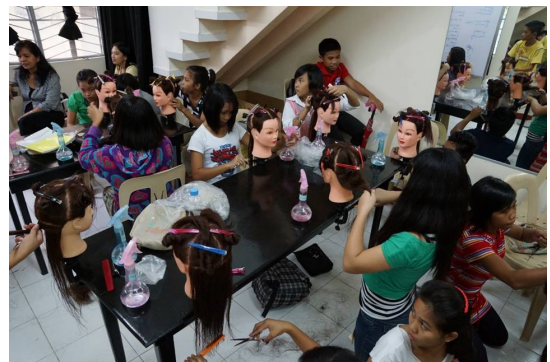
●チカラプロジェクト

本年度は、美容師の皆様の協力を得て、ハサミノチカラを実施しました。5月から3年間のプログラムでハサミノチカラアカデミーを開始。日本のハサミノチカラメンバーの他、フィリピン美容業界を代表するスタイリスト、Jude Hipolito氏、Rose Marinas氏の両名を講師に迎え、5月に10日間の合宿、8月と11月にそれぞれ1日のフォローアップトレーニングを実施しました。アカデミーでは14の施設から集まった16名（12～15歳/男の子2名・女の子14名）のこども達がヘアカットの技術を学んでおり、3年間で美容師として自立するためのスキルを身につける事を目標としています。なお、本年度のハサミノチカラアカデミーに関わる費用を三井住友銀行様より助成して頂きました。

来年度はオロンガポ市の中心地にある商業ビルへのオロンガポ事務所移転に伴い、チカラプロジェクトを併設します。115平米のうち45平米を事務所、70平米をチカラプロジェクトスタジオとし、今後はハサミノチカラのヘアカットトレーニング、ダンスノチカラのダンスレッスン、空手道場、こども達向けのワークショップ等、幅広く活用して行く予定です。新事務所とチカラプロジェクトスタジオのオープンは来年度の2月15日を予定しています。



8月のフォローアップトレーニングの様子①



8月のフォローアップトレーニングの様子②



8月のフォローアップトレーニングでの集合写真

JICA草の根パートナー事業

実施場所：中部ルソン地方全域（オーロラ州を除く）

実施期間：平成25年1月～同年12月

本事業は「フィリピン・中部ルソン地域における児童養護施設のこども達の健全育成と自立のための施設職員能力強化プロジェクト」として、日本国際協力機構（JICA）より委託を受けて今年度10月より開始した3ヶ年の事業です。

●フィリピン・中部ルソン地域における児童養護施設のこども達の健全育成と自立のための施設職員能力強化プロジェクト

本事業は中部ルソン地方全域にある児童養護施設を対象にして、施設職員であるソーシャルワーカー・ハウスペアレント（こどもの日々のケアに直接関わる施設職員）向けの研修プログラムを開発し、実施するというものです。また、本事業ではフィリピンの政府機関である社会福祉開発省（DSWD）第三地域事務所が当会のカウンターパート機関となり、協働で実施しています。

昨年10月より開始した本事業は1年が経過し、カウンターパートのDSWD第三地域事務所や事業の対象である39の児童養護施設とも良好な関係が確立されつつあります。

1年を通してDSWD第三地域事務所の担当職員7名との定例会議を月に1回のペースで実施し、事業の進捗状況の確認や課題の共有、課題の解決に向けた話し合い等を行いました。また、JICAへの事業申請時よりも大幅に日本円が下落していることを受け、本事業における平成26年度の費用の共同負担についてもDSWD第三地域事務所と討議が行われ、正式に承認されました。本決定によってDSWD第三地域事務所の事業に対する積極性および当会とともに本事業を実施する機関として機能していることが再確認でき、持続可能なプロジェクトを構築するための重要な一歩となりました。

1月から11月には本事業に参加する意思のある37施設に対してベースライン調査を実施し、各施設の運営体制および施設や施設職員が抱える問題や課題について情報収集を行いました。特に、施設職員のこどものケアに関する研修のニーズ等を把握するにあたり、重要な成果を得ることができました。なお、残りの2施設については12月末現在までベースライン調査を継続中となっています。また、12月末までに本ベースラインの調査結果報告書を施設ごとにまとめ、ハウスペアレントの職務や役割における調査結果の検証調査も実施しました。結果を検証した後、本報告書をもとに研修

プログラム作成の際の基盤となるハウスペアレントの基準を作成しました。これまでフィリピン全国でハウスペアレントに関する明確な基準は存在せず、本事業の活動の成果として、フィリピンで初めてハウスペアレントの基準が確立され、DSWD第三地域事務所によって認可を受けました。これによって、ハウスペアレントとして働く各施設の職員の能力・スキルの質が保証されていくとともに、施設の中でハウスペアレントが重要な職業や仕事として認識されていくことが期待されます。また、来年度にはDSWD本省へも本基準を提出し、将来的に国の基準として採用されることを目指します。

また、各施設とのMemorandum Of Agreement（MOA）の締結が完了した後、事業をより円滑に進めるために地理的要素や施設数を考慮しながらクラスターの編制を行い、対象地域に6つのクラスターを確立しました。更に、DSWDが主催する四半期に一度の施設長会議やABSNET（Area-Based Standards Network）やREADLANI（Regional Association of DSWD Licensed and Accredited Non-Government Organizations and Institutions）といったDSWDに統制されている施設で構成されている団体が企画するネットワーク会議にも積極的に出席し、各施設や団体とのネットワークの構築にも努めました。

5月5日～12日には東京都社会福祉協議会・児童部会等民間団体の協力により、社会福祉開発省（DSWD）の第三地域事務所所長、本事業担当オフィサー7名および当会スタッフのための本邦研修を実現しました。

本研修において、研修生は日本の児童養護施設におけるこども達のためのケアを行なう仕組み、特にハウスペアレントの役割等について学ぶ機会を得ました。研修生として本邦研修に参加した何名かの施設長はすでに本邦研修で得た学びを自身が受け持つ施設の運営手法に取り入れて実践しています。また、本研修での経験を通して得た学びは今後の研修プログラムの開発や各クラスターにおけるハウスペアレントの組織化といった活動に活かしていきます。

また、7月7日～7月12日には日本人の専門家の方々によるフィリピンへの現場視察も実施され、専門

家の方々に児童養護施設におけるこどものケアにおいて、また、本プロジェクトの実施において貴重なアドバイスをいただきました。本視察を通して専門家の方々とのパートナーシップを築くことができ、日本に帰国された後もハウスペアレント向けの研修プログラムの開発にあたって必要となる参考資料の提供をしてくださる等、継続してサポートをしていただいています。

12月5日にはJICAによる事業の視察が実施され、JICA地球ひろばより洲崎様・高橋様、JICAフィリピン事務所より氏家様に当会事業地をご訪問いただき、事業のモニタリングが行われました。特に、DSWD第三地域事務所を含めた三者間協議では、今後の事業の運営において重要となる技術的なアドバイスをいただくことができました。

来年度は本格的に研修プログラムの作成に着手し、ソーシャルワーカーとハウスペアレント向けの研修マニュアル・教材の開発およびソーシャルワーカー向けのマスタートレーナー研修やクラスター毎に実施されるハウスペアレント向けの研修を実施する予定です。同時に、各クラスターの組織力の強化を目指した活動も実施していきます。



専門家によるフィリピン視察



ベースライン調査を実施中の様子



本邦研修時の様子

フィリピン台風30号「ヨランダ」被害に対する緊急支援事業

実施場所：サマル島

実施期間：平成25年11月11日～同年12月

フィリピン台風30号「ヨランダ」により甚大な被害を受けたサマル島にて、現地NGOと提携し、緊急支援物資を配布する活動を実施致しました。

11月8日にフィリピンのレイテ島及びサマル島、セブ島に上陸した台風ヨランダはフィリピン観測史上最大の被害を与えました。被災者は約1,000万人。フィリピンの人口の1割にも及びます。また亡くなられた方は6,000名を超え、今なお2,000名近くが行方不明となっています。被災状況が判明するにつれ深刻な食料不足が伝えられた事から当会はサマル島のNGO「西サマル開発財団」を通じ、緊急支援を実施する事になりました。提携団体はこれまでに約3,000人×5日分×3回の緊急物資配給を実施しました。配給を実施した地域は東サマルのヘルナニ町及びキアナポンダン町を中心としています。当会としては今週実施される配給で、緊急支援物資の提供を終了します。当初はレイテ島に集中していた支援も徐々にサマル島に広がっており、以前よりも支援物資が集まるようになってきています。提携団体と協議をし、今後集まる支援金に関しては台風により家族を亡くしたこども達のカウンセリング、メンタルケアに活用させていただきます。また、アクションが実施しているお菓子の袋を再利用した製品「エコミスマ」のスタッフを2月を目途に現地に派遣し、一部の商品を被災地で製作する予定です。

当会は元々緊急支援を実施している団体ではなく、児童福祉分野での活動を得意としています。そのため、活動資金が集まりにくい心のケアの分を1月からは提携団体と協議をしながら実施をしていきたいと思えます。引き続き、皆様のご理解とご協力をお待ちしています。

支援金総額：2,258,018円（12月24日時点）

提携先団体情報：

WESTERN SAMAR DEVELOPMENT FOUNDATION
INC.

Door-A, Matutes Alpartment, Cajurao St., Cal-
bayog City Western Samar



被災したサマル島の様子



支援物資を配布する様子①



支援物資を配布する様子②

国際ボランティア体験事業

国際協力とフィリピンのこどもたちを取り巻く環境をより多くの市民の方に知っていただくために当会では設立当初の1994年よりワークキャンプという形で国際ボランティア体験事業を実施しています。

本年度は81名の方が全国から参加をしてくださいました。しかし、10年前には200名を数えた参加者数が年々減少してきており、その原因として経済不況や旅行代理店や大学が同じようなプログラムを実施している事や、フィリピンの治安に対する不安感が挙げられます。国際ボランティア体験事業が占める事業収入の割合が多い当会としまして、その対策として学生ボランティア団体や企業・有志のグループ向けにオーダーメイドのスタディツアーやフィリピンでの研修など、多くの方に参加していただけるプログラム作りを行いました。

●ジャイラホームワークキャンプ

- ① 平成25年 2月 8日～2月 27日 6人
- ② 平成25年 2月 8日～2月 19日 2人
- ③ 平成25年 3月 8日～3月 27日 11人
- ④ 平成25年 3月 8日～3月 19日 3人
- ⑤ 平成25年 8月 7日～8月 17日 7人
- ⑥ 平成25年 8月 7日～8月 26日 2人
- ⑦ 平成25年 8月 17日～8月 26日 5人
- ⑧ 平成25年 9月 2日～9月 11日 8人
- ⑨ 平成25年 9月 2日～9月 21日 5人
- ⑩ 平成25年 9月 12日～9月 21日 3人

本年度は、計10回のワークキャンプを実施しました。本年度のプログラムの特徴として、10日間と20日間のプログラムを行い、より多くの選択肢の中から参加者に選んでもらうことができる環境づくりに努めました。これによって参加者のニーズを把握することができたため、来年度以降のプログラムづくりに生かしていきます。

またボランティアワークでは春期にジャイラホームの安全面を強化するための門と塀作りに取り組み、門を設置する手前まで完成しました。夏期の8月のワークキャンプではハニエル小学校の教室1部屋のペンキ塗り、黒板の設置、タイル磨きをし教室が完成しました。9月には2年生が完成した教室を使い始めました。9月のワークキャンプは子ども達が心理士と1対1で話せるカウンセリングルームと体を鍛えるジムのペンキに塗りをしました。皆で楽しく力を合わせてペンキ塗りは完成しました。他にも、こども達の心理ケアプログラムで行っているソーシャリゼーションにも参加し、参加者によるゲームの企画と運営をして子ども達との交流を深めました。春夏共にホームステイ、プール、さよならパーティーも実施しました。これからもこのような子ども達とキャンパーを繋ぐようなアクティ

ビティーを実施していきたいです。



参加者とこども達

●ストリートチルドレンワークキャンプ

平成25年9月4日～9月11日 7名

本年度は、8日間のプログラムを夏季に1回開催しました。本プログラムではタタッグの支援地域であるマバユアンオールド地区にてホームステイプログラムを6日間実施し、1つの地域に長く滞在しながらフィリピンの一般家庭の生活を体験しました。また、同地区にあるタタッグが運営するECCDセンター（就学前児童のための学習教室）のこども達のためのアクティビティを企画・実施したり、週末にタタッグが実施しているストリートエデュケーション（路上での教育活動）に参加しストリートチルドレンと交流したりする活動を通じて、フィリピンのこども達の環境やこども達を取り巻く社会の問題を目の当たりにしました。また、フィリピンの同世代の若者とのワークショップを通して、フィリピンや日本のこどもや若者が抱える問題や課題について改めて考え、自分達が今できることについて話し合いました。現地の生活を体験しながら、こども達を取り巻く問題や社会が抱える課題につ

いて考えることで、フィリピンの現状をより深く理解することができました。また、様々な環境で生活する子ども達との交流を通して、1人1人の子ども達が持つ可能性にも触れることができたほか、日本に戻ってから自分自身の目標を見つけることもできました。



ホームステイ先の家族と過ごすキャンパー達



センターの子どもとツアー参加者（アジセンツアー）



ストリートエデュケーションに参加するキャンパー

●スタディツアー

- ① 平成25年 2月 14日 ～ 2月 18日 4名
- ② 平成25年 3月 15日 ～ 3月 19日 5名
- ③ 平成25年 8月 8日 ～ 8月 12日 5名
- ④ 平成25年 9月 6日 ～ 9月 10日 8名

昨年度に引き続き、本年度も代表の横田がスタディツ

アーを引率しました。各事業地訪問や横田による講義のほか、夏季のスタディツアーからは、これまで1泊だったホームステイプログラムを3泊に延ばしました。フィリピンの一般家庭で過ごす時間が増えた事によって、より一層フィリピンを身近に感じ、学びや体験を深める事が出来るプログラムとなりました。



2月スタディツアーの様子

国 内 事 業

●チャリティショップ sari sari

オープンから7年目を迎えたチャリティショップですが、2009年のリニューアル時に上がった売上が少しずつ下がって来てしまったので、今年は商品の種類を増やし、新商品を多く並べるようにしました。また、外の看板やウッドデッキのメンテナンスとしてペンキの塗り直しも行いました。チャリティショップは地域の方が気軽に国際協力することができる場所ですが、当会が実施している女性の所得向上プロジェクトで製作しているエコミスモやプラスチックエコバッグなどの貴重な販売場所でもあるため、これからもより多くの方にお越し頂けるよう、工夫していきたいと思っています。今年度の売上は総額972,356円でした。



補修作業によってきれいになったお店

●「土曜学校世界を知る会（小3～6年コース）」

本事業は2005年以降継続して行っている講座です。今年度は武蔵野市内の小学校に通う3年生～6年生、計25名が参加し全8回の講座を行いました。講座ではゲストティーチャーを招き、フィリピンを初め諸外国の文化を学びましたが、例年同様、フィリピンの小学生と1対1でパートナーを組み、文通やビデオレターでの交流も行いました。また、最終回にはJICAネットを利用してリアルタイムでパートナーと交流をしました。今年はJICAネットを初めてむさしのプレイスで繋ぎましたが、無事に接続もでき、子ども達の交流も行うことができました。来年も本事業は継続予定です。



JICAネットでパートナーと集合写真

●学校教育との協働授業実践及び講師派遣

本年度は以下の学校で協働授業を実践しました。各学校にあわせた内容の授業を実施し、文通やビデオレターの交換を行いました。

筑波大付属小学校
武蔵野市立第一中学校
多摩市立落合中学校
亜細亜大学
新潟情報大学
成蹊大学
早稲田大学
他

●国際協力・交流イベント及び地域イベントへの参加

(1) アースデイ東京（4月20日、21日）

本年度も代々木公園で開催されたアースデイ東京に出店し、sari sariとエコミスモの物販を行いました。あいにくの悪天候でしたが、9名の方がボランティアとして手伝ってくださり、本年度も賑やかな出店となりました。



アースデイの様子

(2) 武蔵境ピクニック (5月18日)

毎年5月に武蔵境駅前で行われている、武蔵境ピクニックに出店しました。イベントを通じて親子連れや年配の方など地域の方々にアクションやsari sariを知ってもらう機会となりました。



武蔵境ピクニックの様子

(3) メトロポリタンロックフェスティバル (5月25日、26日)

新木場若洲公園で2日間に渡り開催されたメトロポリタンロックフェスティバルに初出店しました。国際協カイベントとはまた違う客層でしたが、色とりどりのsari sari、エコミスマ商品が目を引き、たくさんの方々がブースで足を止めてくださいました。



メトロロックの様子

(4) さかいマルシェ/さかい夜市 (8月4日、9月1日/8月17日)

月に1度日曜日の朝に武蔵境駅前で開催されているさかいマルシェと、8月17日に日本獣医生命科学大学で開催されたさかい夜市に出店しました。どちらも地域の活性化を図ったイベントで、近隣にお住まいの方々が多数来場されました。



さかいマルシェの様子

(5) グローバルフェスタ (10月5日、6日)

日比谷公園で行われた国際協カイベント、グローバルフェスタに2年ぶりに出店しました。1日目は雨が降ってしまいましたが、2日目は天候も回復し過去のワークキャンプ参加者や国際協力に関心のある学生・社会人など、たくさんの方がブースへ足を運んでくれました。



グローバルフェスタの様子

(6) むさしの国際交流まつり (11月17日)

本年度もむさしの国際交流協会主催の国際交流まつりに参加し、タピオカドリンクとクリスマス雑貨等の販売を行いました。例年同様、地域の中学生もお手伝いに来てくれました。



むさしの国際交流まつりの様子

●会員企画

当会の会員様が主体的に活動を企画・運営する活動です。本年度、以下のような活動がありました。

チャリティイベントforダニエル

7月12日に六本木で、孤児院ジャイラホームの入所児童であるダニエルの心臓病の治療費を募るチャリティイベントが行われました。イベントには30名以上の参加者が集まり、参加費の一部が心臓病の治療費として寄付されました。



チャリティイベントforダニエルの様子

●出張チャリティショップ

本企画は大学の学園祭や地域のお祭りなどでチャリティショップの品物の貸し出しを行い、チャリティショップと同じ仕組みで出張チャリティショップを開いていただく活動です。本年度は、群馬県立健康科学大学、亜細亜大学、大阪教育大学、佐賀大学、清泉女学院大学・短期大学の学園祭と、大阪で開催されたキャンパスコレクションで出張チャリティショップが行われました。



清泉女子学院・短期大学の学園祭の様子

●ボランティア派遣

昨年度に引き続き本年度も三鷹市にある児童養護施設朝陽学園へボランティアを派遣しました。派遣項目は以下のとおりです。

朝陽学園 週末遊びボランティア（随時）
他